瀬戸内海と宇和海を結ぶ街道の中間部という特徴をもった小城が、元亀三（一五七二）年に、豊後の大友軍との合戦の舞台となった。城主は得能彦右衛門尉。出海や磯崎の伊予灘側の武士団が防御に参加したとある。それ以前には城主、兵頭越前守の永禄二（一五五九）年七月一〇日没と記された過去帳（高徳寺過去帳）が残る。

（四）長崎城

伊方町九町を見下ろす標高一一五メートルの長崎山の頂上にあり、南に延びる女子岬の付け根部に位置する。九町地区は平野の北側の丘に金山城が築かれていたが、後に長崎城が本城となったようで、房綱の部下の得能主膳通明が城主であった（『宇和旧記』）。主郭から約四〇メートル東に、からめ手となる空堀が掘られる。城構えからすると、西（九州）の海側からの攻撃に対して築かれており、西南側には城戸、城の首などの小字が残る（注6）。

（五）高森城

大洲市平野町平地地区の北側・標高一九〇メートルの尾根上に築かれる。山頂部の南主郭と、堀切を挟んだ北側の尾根の北主郭に分かれる連郭式の城構えで、四条の堀切や一二以上もの縦堀などが付く。城主は梶谷氏で、一時期大津城を支配した大野直之に乗っ取られるが、道後の河野氏らの援助により城を回復。天正一二（一五八四）年の下城時に平地村に降りる。萩森城のような新築の城ではなく、梶谷氏の砦として戦国時代を通して存在した（注7）。

天正二（一五七四）年、土佐・中村の渡川合戦で敗れる前の一条兼定が、しばらく城の近くに住んでいたとの記録があり（資料9）、兼定関連の隠れキリシタン故地ともいわれる所があるが確かな根拠はない。

（六）『宇都宮房綱侍帳』

萩森城主の宇都宮彦左衛門尉房綱には、「侍帳」（資料5、『宇和旧記』など）が残る。それによると八三人もの直参の侍がいたとある。しかしそれには、大洲市長浜町今坊・滝山城主久保氏の侍帳の人名（三八人分）が、重なって記載されたとみる。現実に房綱に八三人もの侍（家臣団）がいたとは思えず、その半分位ではないか（房綱は江戸時代表記で約七、〇〇〇石の収入高とある）。

主な家臣には、高森城代の梶谷兄弟（平地地区）、城高城代の大塚助兵衛（喜木地区）、出海浦水上城主の弟の兵頭岩右衛門（日土地区角仙森城主か）、野田与七（野田地区の侍）、日土の二宮市郎右衛門、雨井の城戸源右衛門、津羽井の村上与惣右衛門、松本市右衛門などがおり、二宮新助、得能主膳・大久主馬、佐々木民部らは佐田岬半島部の諸城を守っていた。このほか久保氏侍帳と重なるが、菊池平兵衛、菊池岩右衛門、矢野源左衛門、吉見新三郎、角田仁助、若山八右衛門などは、現在の八幡浜市に縁の姓と見られる。ただ「侍帳」の掲載される『宇和旧記』が江戸時代の作成のために、その実在は判断しがたいところもあるが、八幡浜や保内や半島部の宇都宮領の砦を守備したと思われる（注8）。

二　摂津氏側の山城と家臣たち

一方の摂津氏側は、五反田の元城を本城（摂津親安居城）として、天神山城（城代は矢野民部家成）や今城（同・摂津親宗（親安の嫡子））、飯之山城（後の穴井・井上氏）や江の川城（江の川殿という若山・井上氏）、石之棟城（石之峠・石堂城ともいう、郷殿菊池氏）や田中城（中津川・井上氏）、周治ヶ丘城（摂津親綱（実親の弟））などの支城を持っていた。また飛び地として、伊予灘側の磯崎浦に

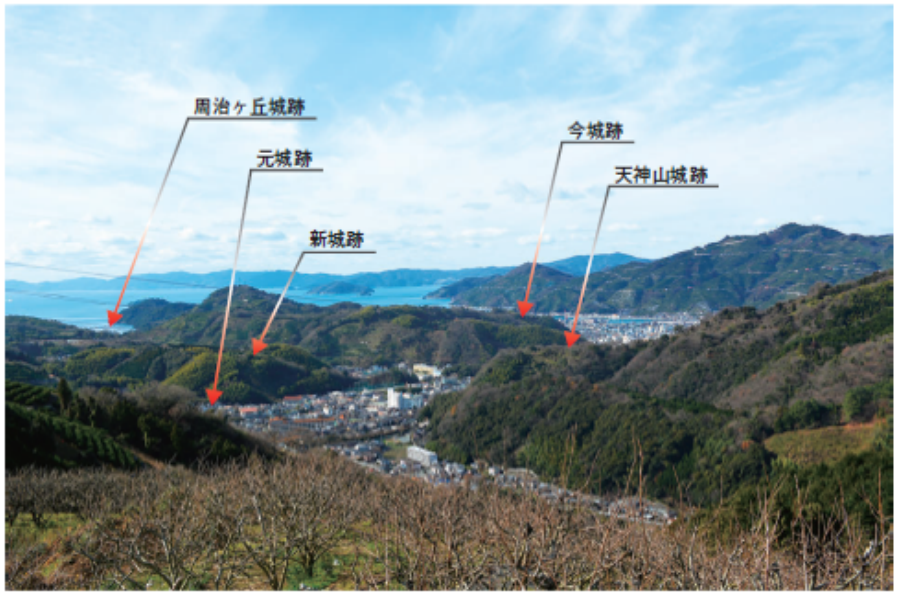


写真2-4　川舞から見た城跡　　2017（平成29）年撮影

砦（磯崎城）を持ち、矢野民部家成の弟・家盛が城代を務めたとある（資料6）。江戸時代の吉田藩の飛び地（喜木津・広早浦）と同様、上方に行くための港を確保していたか。後に宇和島藩はこの磯崎港を、藩船の船泊港として利用した。

（一）元　城

本城の元城（別名元井城・写真2-5）は、神山小学校西隣で、五反田川西岸にある北に傾斜する海抜高六〇メートルの丘陵地を利用した。空堀や郭・武者走りを設け、階段式の連郭の城郭である。六か所の曲輪、空堀一、縦掘り六か所などの遺構が発掘された。東西七〇メートル、南北一七五メートルの規模を持つ。しかし、落城後は山林や畑地となり、平成一一（一九九九）年に発掘調査を実施した後、記録保存して市土地開発公社の宅地開発地となり、そのほとんどは消滅した（注9）。

元城の西の北に延びた尾根は新城と呼ばれ、曲輪や掘切が築かれた砦があった。新城の丘陵の北端には八尺神社があり、その西と南の裾には後世に畑化したが、曲輪状平坦面が残る。南北朝期以降の摂津氏の本拠地としての元城は、東の天神山城と五反田川、北の八尺砦、西の新城とで守られていた。旗下の侍は二五騎（『予陽二名集』）があったとされる。

写真2-5　元城跡（発掘調査時）
1999（平成11）年
山村好克撮影

当日は長蛇の列が続き、その後も盛況を極めた。開店イベントでは、八幡浜の名物を盛り込んだ「角力甚句」が高砂部屋の呼出によって披露された。また関脇貴の花、小結高見山のサイン会が行われた。店内に流れるフジの歌「ハッピーショッピングフジ」は、昭和五一（一九七六）年に誕生している。

写真5-23　フジ八幡浜店オープン

㈱フジ提供

三　高度経済成長期と観光・レジャー

この時期は、人々の生活も、戦争中の緊張や不自由から解放されるとともに経済成長に伴う所得上昇によって、少しずつ余裕が出てきて余暇への関心が高まってきた頃であった。

八幡浜市の新町、矢野町（後に銀座通り）商店街は常に人通りが多く、銀天街と呼ばれたアーケードが付く。伊予鉄自動車の定期バスが走っていた新町通りは、バスと車の擦れ違いのたびに車掌が降りて、路上に止めてある自転車やバイクを移動するのに大わらわであった。土曜の夜や日曜日となると、両商店街や川之石の本町商店街は人であふれにぎわっていた。

（一）両市町の観光案内

このような中、合併後両市町は、それぞれの市町の特色ある産業及び観光資源を広く紹介するため、観光案内パンフレットを刊行している。これらのパンフレットから、当時の両市町の様子をうかがうことができる。

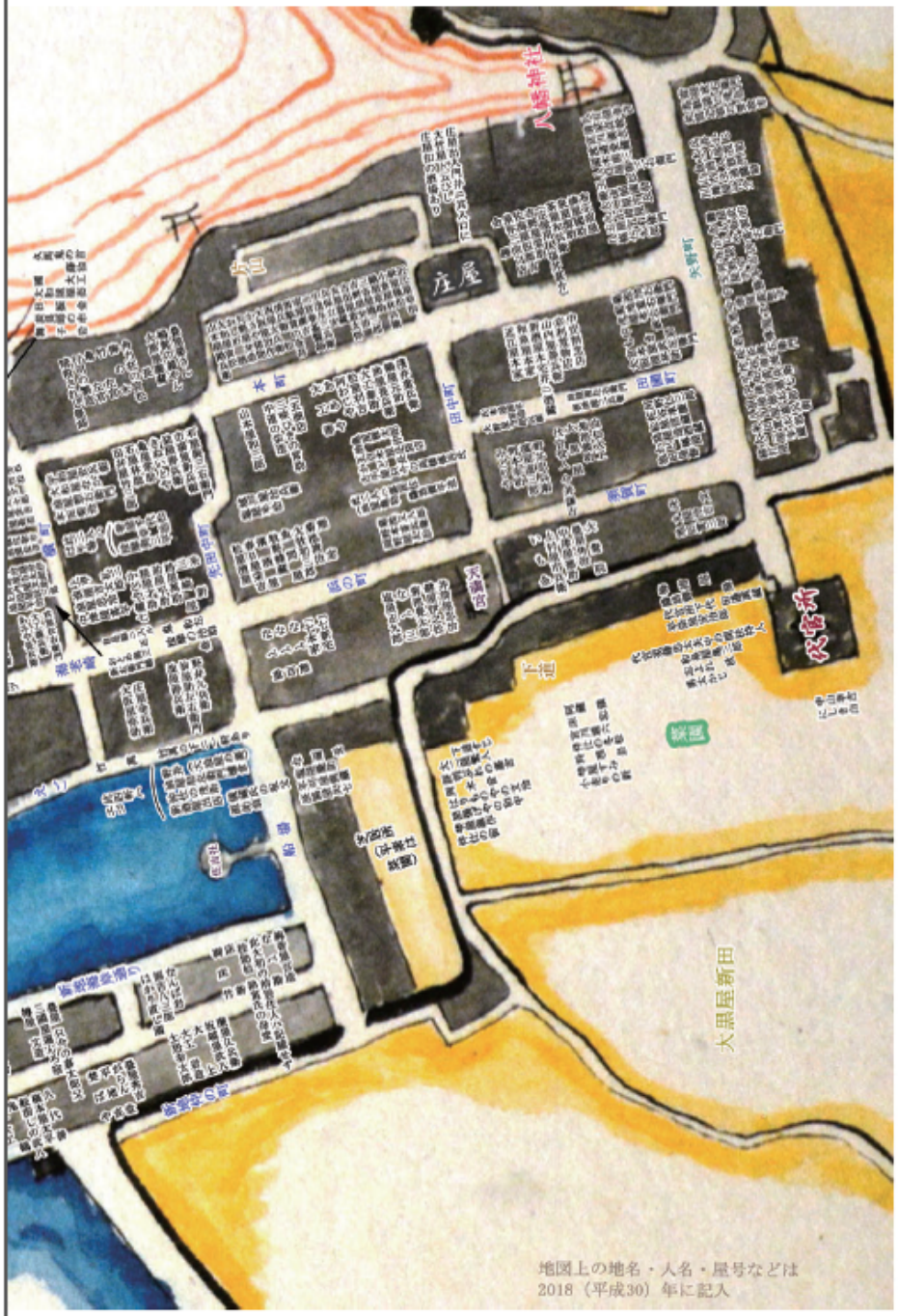
保内町の観光案内

保内町より「伊豫路の観光　新興保内へ」と題した観光案内パンフレットが昭和三〇（一九五五）年～同三五（一九六〇）年の間に発行されている。パンフレットを開くと表面（写真5-25）には、観光御案内先が絵地図で紹介されており、裏面にはその各案内先の解説がある。裏面には、ほかに町勢の大要、産業の様子、交通案内などが次のように紹介されている。

写真5-24　保内町の観光案内

保内町　御観光のしをり

写真5-25　伊豫路の観光　新興保内へ

右者當辰二月御改男人高壱万七拾五人ニ割如此
一十五日曉七ツ時迄ニ役人壱人宛被成召連野田大助宅へ
御出張可被成候　但上下持参之支
一各様并役人中賄者用意致候ニ付弁當持参ニ及不申候
但御供之分者用意不致候間一同分弁當持参
致候用御取計可被成候
一踊子歌諷共十五日曉七ツ時迄ニ身の笠并半紙弐枚
づゝ之幣壱本つゝ持参致候而矢野町河原へ罷出候事（）
一村浦壱ヶ所ゟ仙過三枚之幟壱本宛持参可致事
但踊子何拾人何村与書付いたし持参之事
尤歌諷同断之事
一踊子千人者闕不申様相備可申候間弁當番者別ニ御差出
可被成候
一踊子歌諷共不メ候之儀御座候而者不宜候ニ付五人頭
壱人宛差添御差出可被成候
但弁當一宇持参之事（）
一休足之節茶者川原ニ用意致置候得共多人数故茶碗
行屆不申候間銘々持参致候様可被仰聞候
但茶者わかし置候ニ付村浦休足之場所へ
持参候やくわん村々人数ニ応し為御持
可被成候
一申迄も無之候得共踊子歌諷其外出夫之者かざり
ヶ間敷支度ニ罷出候義無用雨乞祈念等之儀者
別而一心をこらし不申候而者感應も在之間敷ニ付右之趣
重々心得御申付御差出可被成候
一踊子歌諷其外出夫共一切賄用意不致候間弁當持参
致候様可被仰付候
一十五日迄ニ能潤雨致候ハヽ延引可致候間人数御差出
被成間敷候
右之趣時付多通ニして御手合申上候間夫々無間違
御取計可被成候己上　同十二日夜四ツ頃矢野町ゟ受取早々舌間
浦へ持ス

資料30　幕末から明治初年頃の八幡浜浦の町並み